

斉藤別当実盛のことなど

結城 洋一郎

私は秋になると、しばしば「むざんやな甲の下のきりぎりす」という松尾芭蕉の一句を思い浮かべる。

中学か高校の頃にこの句を知ったのだが、その後永らく、句の意味が全く理解できないままに時を過ごしてきた。ところが、ふとしたきっかけでこれに触れた文章に出会い、以来、私にはこの一句が忘れられないものとなったのである。

ご存知とは思いますが、少し歴史を振り返ってみよう。

現在の山形県を南下した芭蕉は、九月中旬に石川県の小松に入り、太田神社で斉藤別当実盛（さいとうべつとうさねもり。真盛とも書く。）の兜を拝してこの句を詠んだ。

斉藤実盛は、源義賢が源義平に討たれた時、当時二歳であった義賢の子・木曾義仲をかくまってその命を救った人物である。

その後、実盛は平家に仕えたため木曾追討軍に加わったが、敗戦濃厚の中、老齢であることを隠すために髪を黒く染め、ただ一騎踏みとどまって木曾勢に討たれた。

その首実検の際、実盛と懇意であった樋口兼光がその首を見て、「あな無残や、斉藤別当で候ひけり。」と泣いた。兼光は義仲

の乳母兄弟で、今井兼平（後出）と巴御前の兄である。義仲もはらはらと涙を流し、実盛の恩義に報いるため彼を丁重に供養したのであった。

その実盛の兜が祀られているのが小松の太田神社で、芭蕉はこれ見に行き「無残やな…」と詠んだのである。

この義仲ら乳母兄弟には後日談がある。義仲は源頼朝の軍に追われ、最後は今井兼平と二騎だけとなった。

兼平は、弱気を見せる義仲を叱咤して鼓舞するのだが、終に覚悟を決め、義仲が自害する時間を稼ぐため、ただ一騎で防戦に努めて戦死し、義仲も討たれた。

この時、他の場所で戦っていた樋口兼光は、彼らの死を聞き、兄弟たちの首の引き回しに随行することを願ひ出て打ち首となった。

ところで話は変わるが、昨年来一躍有名となった直江兼統は、幼名を樋口与六というように、樋口兼光の子孫であると言われている。

彼は上杉家が会津に移る時に米沢領を与えられ、関が原の敗戦に際しては上杉家の存続に奮闘し、結局、上杉は直江の米沢に本拠地を移すことになる。

上杉一二〇万石は米沢三〇万石に減封され

たが、上杉家はそれまでの家臣団を一人も切り捨てることはなかった。これが米沢藩の貧しさに繋がるのだが、歴代の藩主は産業の育成に努め、家臣と領民は上杉家を篤く信頼し、その伝統は今日まで続いている。

私の故郷は米沢の隣にある山形市で、旧・最上藩の本拠地である。そして関が原の合戦の際、直江兼統が最上領の長谷堂城を攻める。昨年はその、「直江兼統公本陣跡」なる旗が林立していて驚いたものであった。

このように、山形と米沢はかつて最上藩と上杉藩とに分かれて戦った仲なのだが、山形の人々は米沢・上杉の人々に対して強い尊敬の念を抱き続けてきた。

それはひとえに、上杉の主徒が一貫して「義」を重んじる人々だったからである。その伝統は遠く源平の時代に連なり、豊臣、徳川の心を動かし、芭蕉をして小松に足を運ばせ、平成の世にあつてなお、直江の旗を林立せしめている。

ひるがえって今日の政治家たちは、しばしば「信なければ立たず」という言葉を口にしているが、真にその言葉を信じ、これを実行しようとする者がどれほど存在するのだろうか。命を賭して敗將の幼子をかかまう優しさ、名を惜しんで一騎留まる誇りとを兼ね備えるような人物がいるならば、そのような人こそ、この国の将来を託したいと思う昨今である。

ハゆうき よういちろう・小樽商科大学教授